

主体的な学習からアクティブラーニングを理解する

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

<http://smizok.net/>

E-mail mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

今日のスライドは溝上HPIにアップしますので、欲しい方はダウンロードしてください

Contents

- ①主体的な学習とは
- ②主体的な学習からアクティブラーニングを理解する

Contents

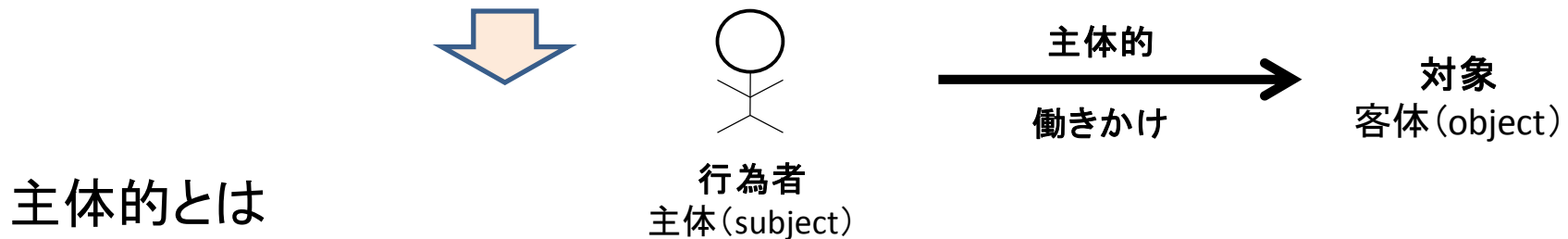
- ①主体的な学習とは
- ②主体的な学習からアクティブラーニングを理解する

「主体的」とは(定義)

- ・ **主体**とは、「他に対して、働きかける当のもの。認識に関しては主観と同義であり、実践的には意識と身体を持った行為者をさす」
- ・ **主体的**とは、「他に強制されたり、盲従したり、また、衝動的に行ったりしないで、自分の意志、判断に基づいて行動するさま」
(『日本国語大辞典(第二版)』小学館, 2001)

👉ポイント

- ・ 行為者が**主体**である
- ・ 行為の先にある**対象**としての人・ものが**客体**となる
- ・ その上で、**主体－客体**の関係性がある



主体的とは

「行為者(主体)が対象(客体)にすすんで働きかけるさま」

と定義される

「主体的」に当てる英語は？

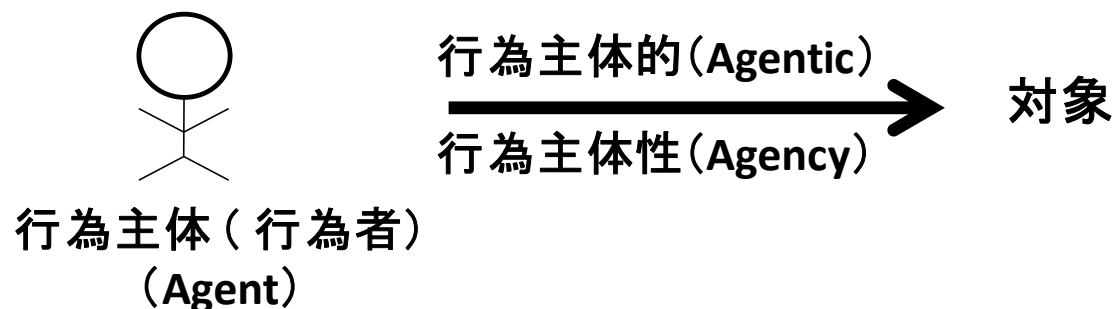
「行為主体 (agent)」→「主体」

「行為主体的 (agentic)」→「主体的」

「行為主体性 (agency)」→「主体性」

👉 心理学では Bandura (1989; 2001)、Ryan & Deci (2000)
Tomasello (1995) など

👉 社会学では、社会 (構造) に対する個人の主体性を
「行為主体性 (agency)」と呼んで研究が進められている



主体的な学習とは

主体的 (agency) とは

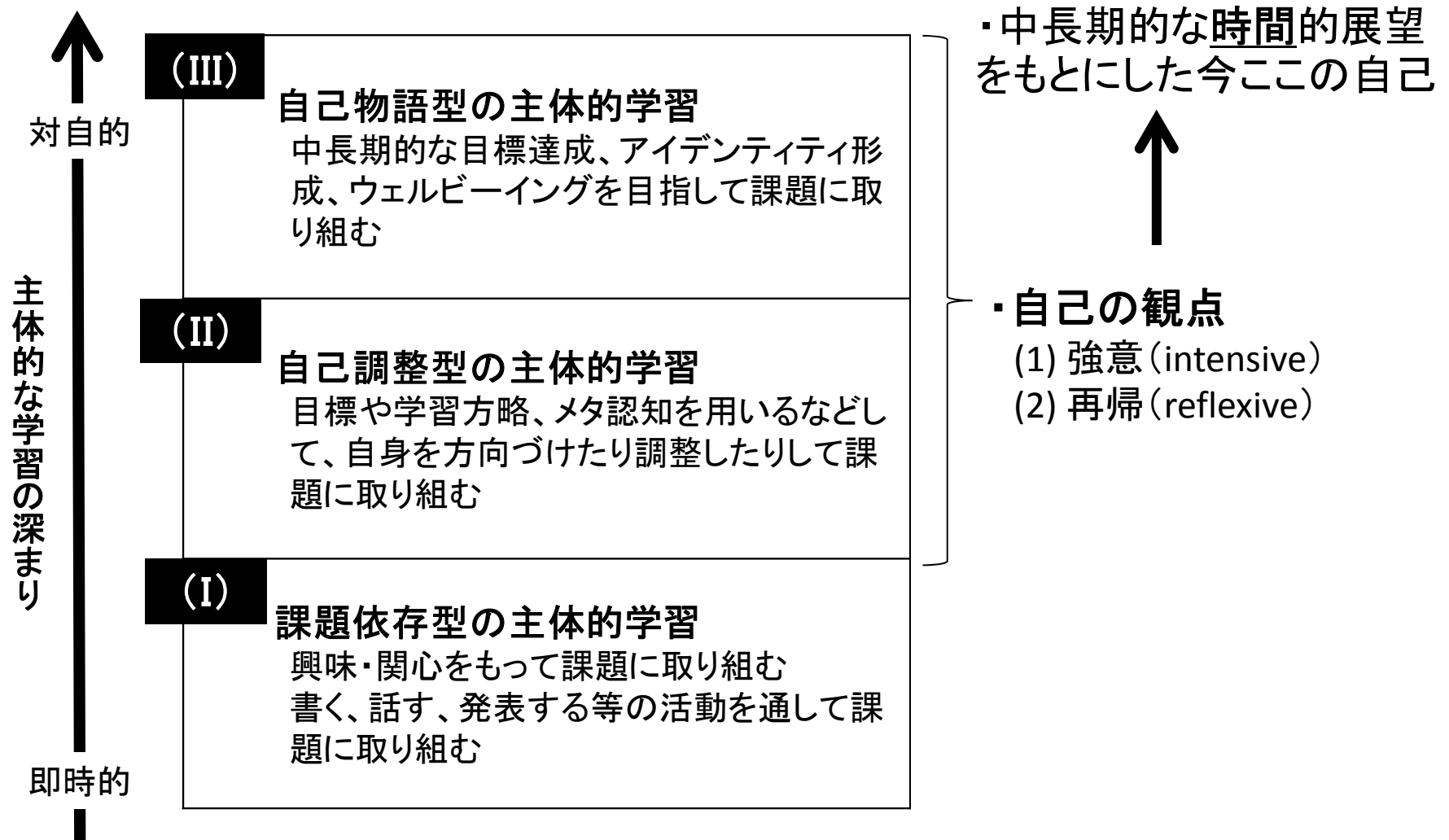
「行為者 (主体) が対象 (客体) にすすんで働きかけるさま」



主体的な学習 (agentic learning) とは

「行為者 (主体) が課題 (客体) にすすんで働きかけて取り
組まれる学習のこと」

三層で理解する主体的な学習



Contents

- ① 主体的な学習とは
- ② 主体的な学習からアクティブラーニングを理解する

アクティブラーニング(確認)

◆一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセス(*)の外化を伴う。

◆知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

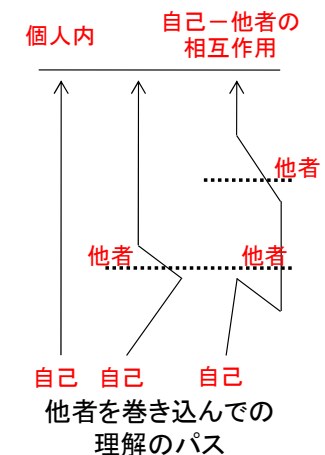
(*)認知プロセスとは

「知覚・記憶・言語、思考といった心的表象としての情報処理プロセス」

(論理的 / 批判的 / 創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など)

👉ポイント:

- ・講義脱却してAL型授業(講義+AL)
- ・とくに学習の社会化



初等中等教育に降りるAL

- ・下村博文文部科学大臣より中央教育審議会へ諮問(2014年11月20日)『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』

・課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習のこと
・何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、さらには、豊かな感性や優しさ、思いやりなどの豊かな人間性の育成に関係づけられるもの

👉ポイント ・講義一辺倒の授業を脱却(×)
・活動/学習の社会化(○) ・能力の育成(○)

- ・「学力の三要素」を重ねて理解していけばいいのではないか？

- (1) 十分な知識・技能
- (2) それらを基盤にして答えのない問題に自ら答えを見出していく思考力・判断力・表現力
- (3) これらの基になる主体性をもって多様な人びとと協働して学ぶ態度

『高大接続システム改革会議「中間まとめ」(素案)』(2015年7月13日の資料1)

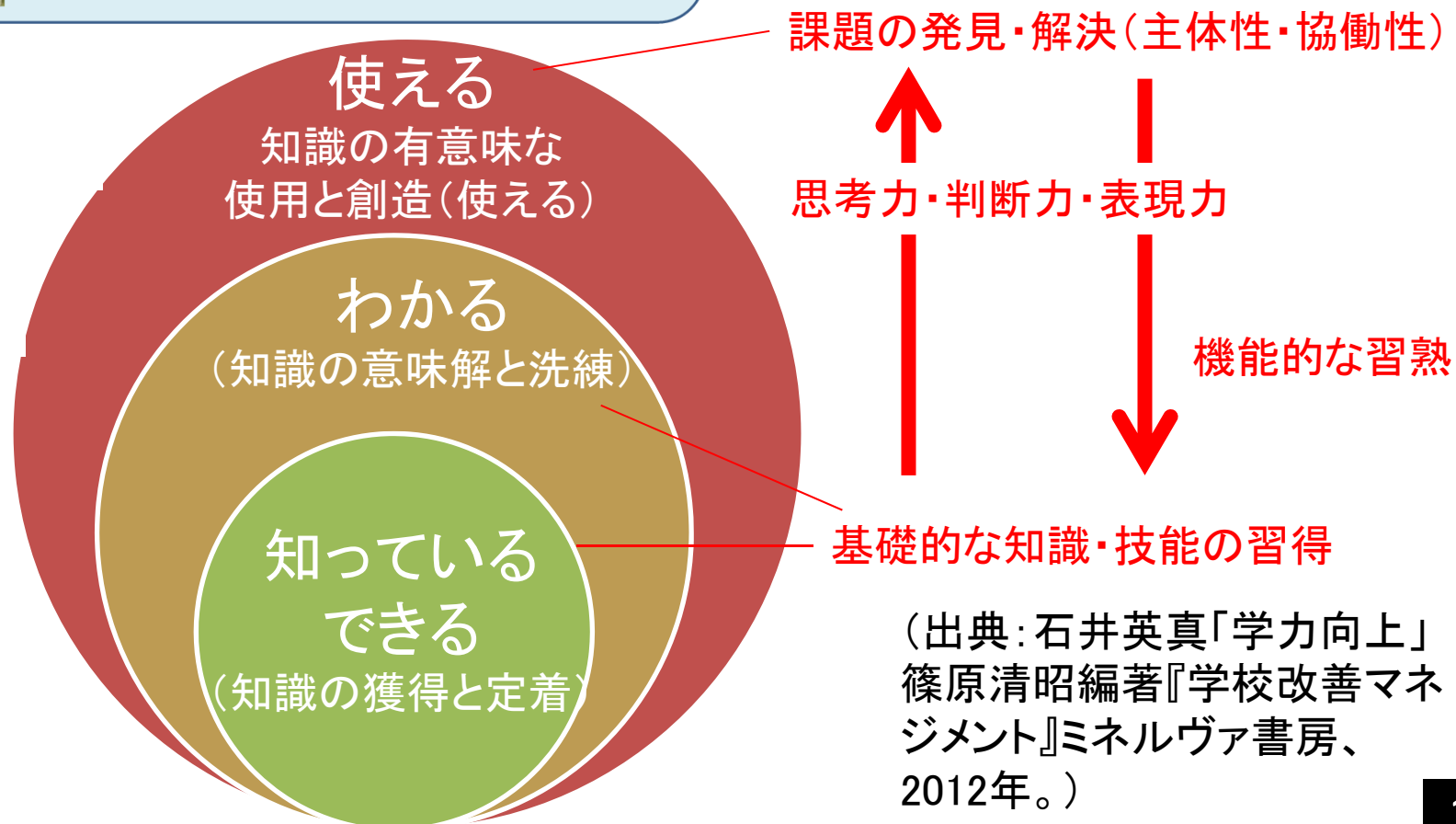
めざす学力・学習の質(教育目標の認知レベル)の明確化

第9回キャリア教育推進フォーラム(2015年8月7日)



新しい学力と学びを捉える パフォーマンス評価

石井 英真
(京都大学大学院教育学研究科)



言語活動の充実とALとの関係

ALの定義

◆一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセス(*)の外化を伴う。

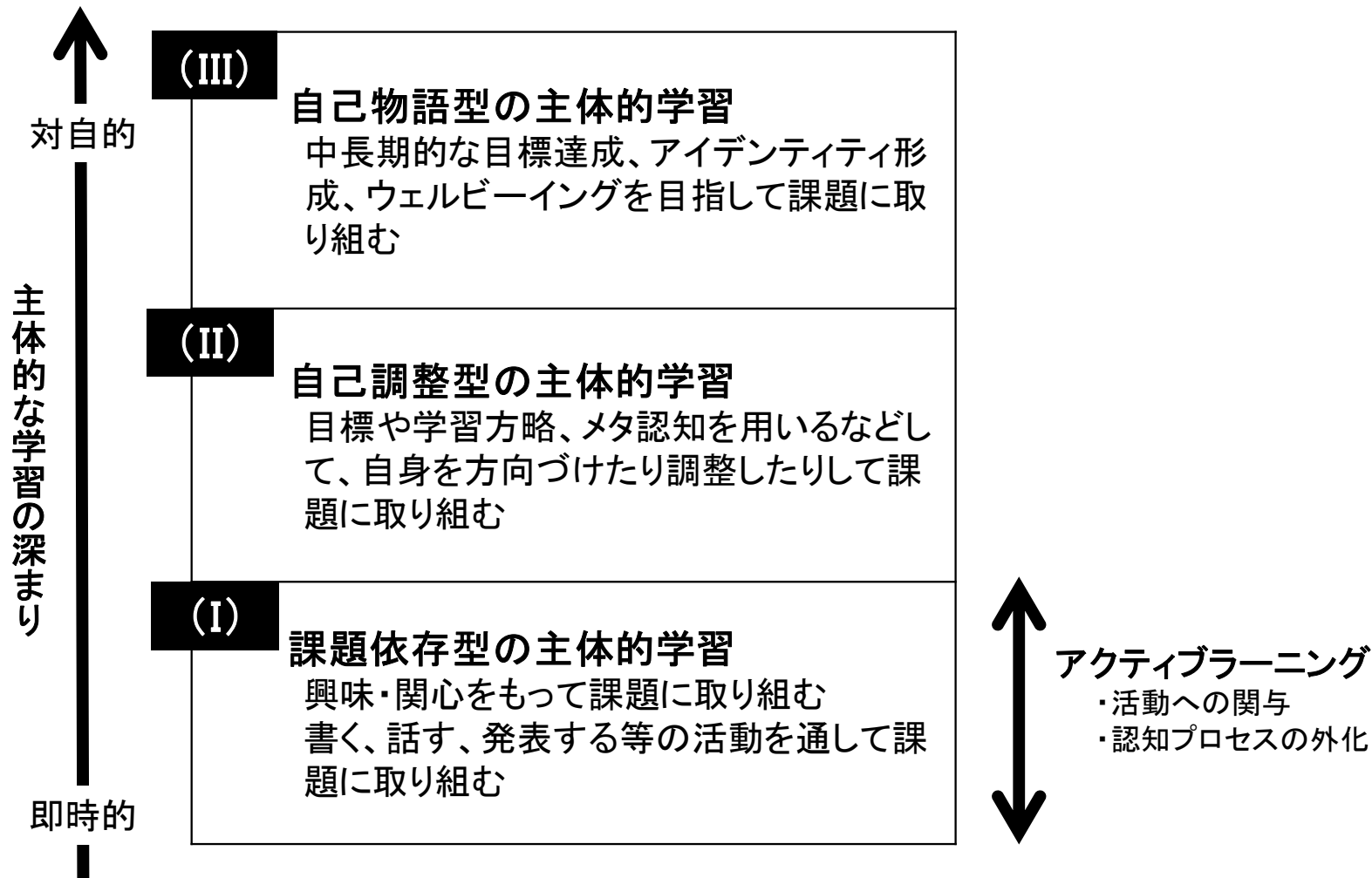
◆知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

☞ 溝上のALの定義と「言語活動の充実」とはほぼ同じ

☞ あえて関係・差異を指摘するならば、

- ・ALの中核的活動として「言語活動」
- ・ALはトランジション課題の解決を直接謳うものとして、大学教育で登場したもの

アクティブラーニングを主体的な学習論に位置づける



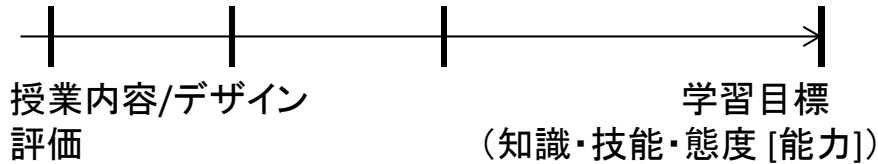
ディープ・アクティブラーニング

・深い学習

(1)学習への深いアプローチ(2つ以上の知識が繋がる、意味ある学習)

(Entwistle, 2009; Marton, Hounsell,& Entwistle, 1984; Marton & Säljö, 1976)

(2)構成的な整合性(constructive alignment)(Biggs, 2011)



(3)学習対象とバリエーション論

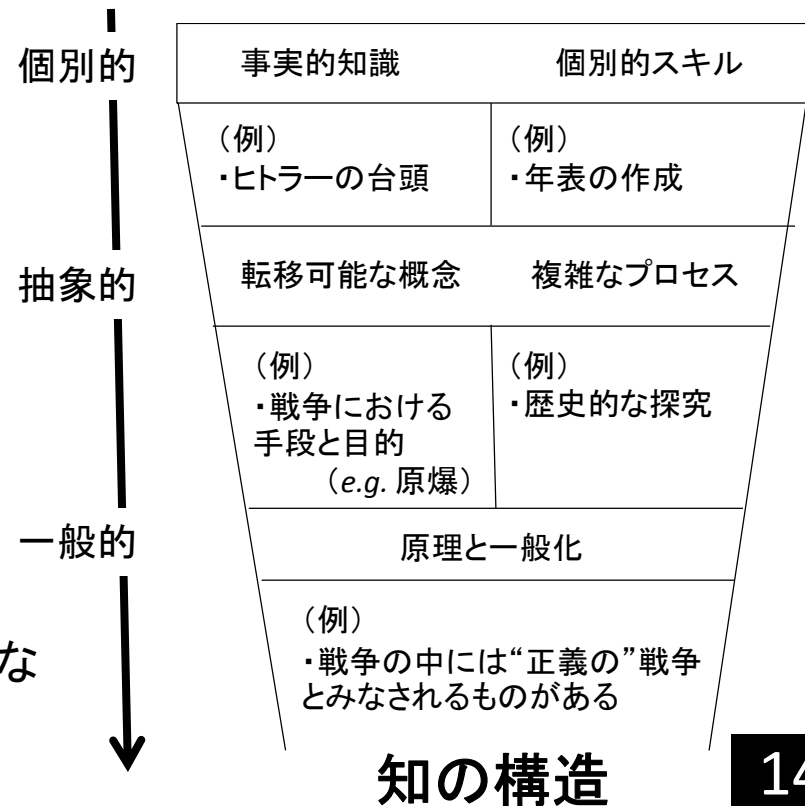
(Bowden & Marton, 1998)

・深い理解 (McTighe & Wiggins, 2004、右図)

・深い関与

ーE.バークレーの関与論

動機づけ×アクティブラーニング(積極的なマインド)の相乗的な相互作用



溝上にとってのディープ・アクティブラーニング(DAL)の位置づけ

ALに対して「活動あって学びなし」という批判 → DAL

- (1) バークレーのいう積極的なマインドを伴うAL(深い関与)
- (2) 学習の質が蔑ろにされている(深い学習、深い理解)

溝上の観点1: 溝上の定義するALと松下(バークレーほか多くの教育関係者)の見るALがそもそも違う

◆一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

<外的活動>

<内的活動>

◆知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

溝上の観点2: ALだけで学習の質まで問い、それでALを問題視するという発想の構造がおかしい

溝上(2014)

第4章 アクティブラーニング型授業の質を高めるための工夫

第1節 学習内容の深い理解を目指す——ディープ・アクティブラーニング

- (1) 学習の形態を問いつつ内容を問う
- (2) 深い学習へのアプローチ
- (3) どのようにして学習への深い・浅いアプローチを見定めるのか——コンセプトマップというアセスメントツール
- (4) 授業・コースデザインの問題——筆者のコンセプトマップの使用例を通して

第2節 授業外学習時間をチェックする

第3節 逆向き設計とアセスメント

第4節 カリキュラム・コースシステムとして発展させるアクティブラーニング型授業

- (1) 他のコースとの関連、学年配置を考える——カリキュラム・ディベロップメント
- (2) 授業を週複数回にする

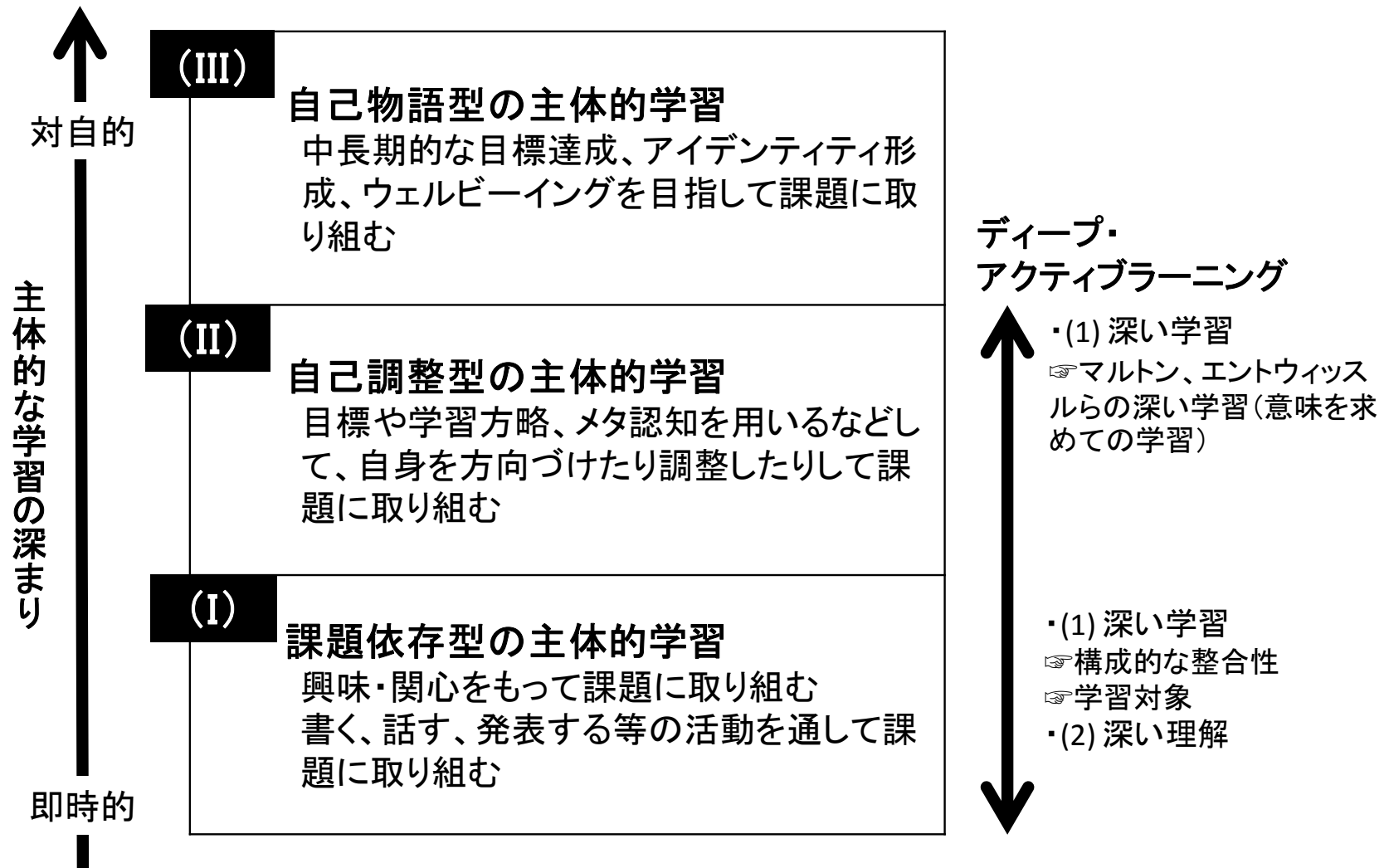
第5節 アクティブラーニングのための学習環境の整備

☞ この発想の構造が正しいなら、動機づけや目標、学習方略といったさまざまな学習に関するこれまでの理論が批判の対象となる。

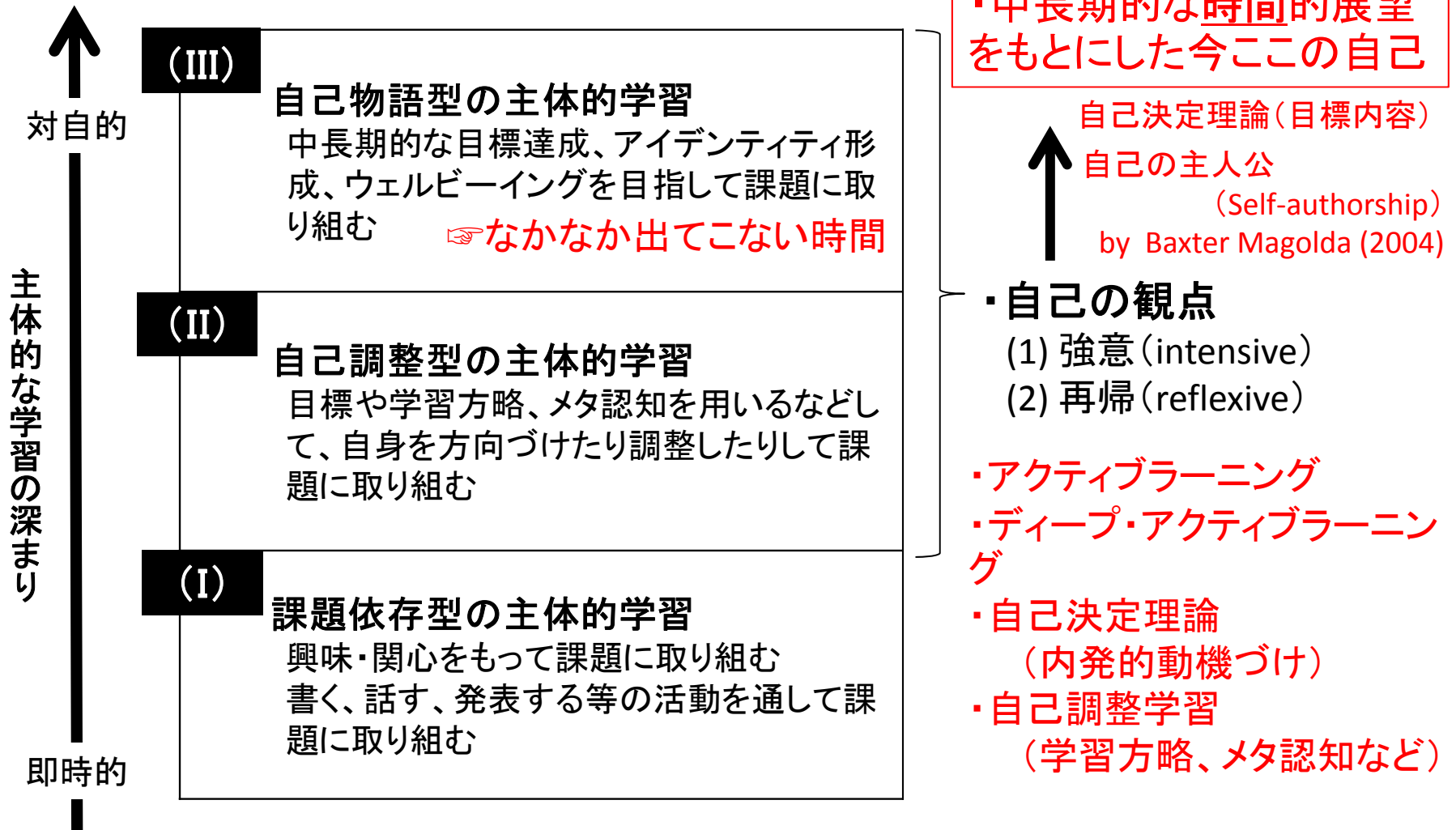
2

16

ディープ・アクティブラーニングの主体的な学習論への位置づけ



なかなか出てこない自己物語型の主体的学習

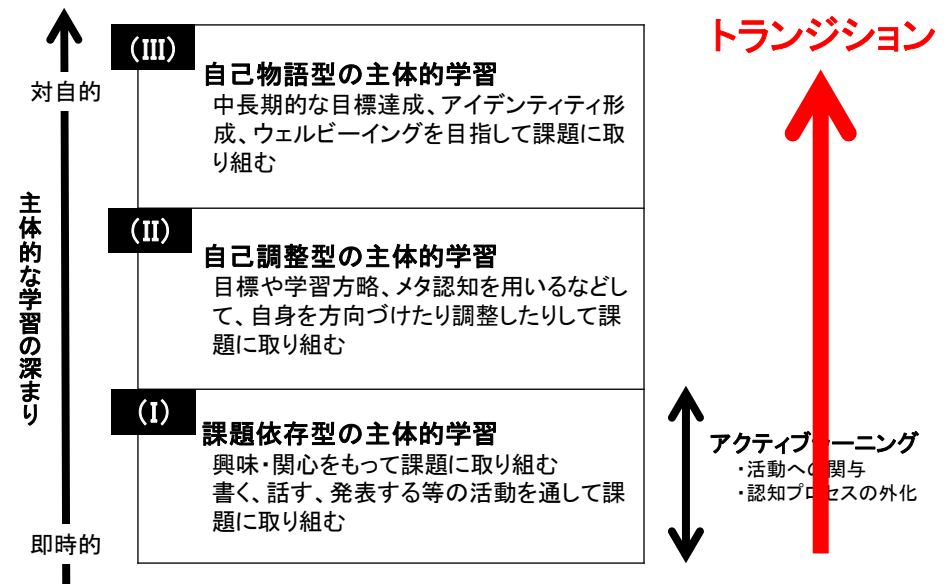


➡ 溝上慎一『主体的な学習からアクティブラーニングを理解する』(玉川大学出版部)(2016年3月刊行予定)

主体的な学習論から言えること

- 私たちが目指すほとんどの主体的な学習論は
 - 「課題依存型」を基礎としつつ
 - それを「自己調整型」に上げていくという構造をもっていること。
- 「自己物語型」がほとんど見られないこと

▪ しかし、溝上のAL論は、**トランジションの文脈**を前提として提唱されているものだ
(キャリア形成を含む)



ご清聴有り難うございました

Contents

- ①主体的な学習とは
- ②主体的な学習からアクティブラーニングを理解する

興味があればお読みください

溝上慎一・松下佳代(編) (2014). 高校・大学から仕事への
トランジションー変容する能力・アイデンティティと教育
ー ナカニシヤ出版

この10年、世界的に喫緊の課題となっている学校から仕事へのトランジションを、国際的に定義し・国際的な近年の動向を概説したもの(溝上慎一)。ほか「大学から仕事へのトランジションにおける<新しい能力>」(松下佳代)、「<移行>支援としてのキャリア教育」(児美川孝一郎)、「アイデンティティ資本モデルー後期近代への機能的適応」(ジェームズ・コテ)、「後期近代における<学校から仕事への移行>とアイデンティティー「媒介的コミュニティ」の課題」(乾彰夫・児島功和)ほか。



溝上慎一 (2014). アクティブラーニングと教授学習パラ
ダイムの転換 東信堂

アクティブラーニングを理論的・実践的に包括的に概説した著書。
第1章:アクティブラーニングとは 第2章:なぜアクティブラーニングか
(教えるから学ぶへ、情報・知識リテラシー) 第3章:さまざまなアク
ティブラーニング型授業(ピアインストラクション、LTD話し合い学習法、
PBLなど) 第4章:アクティブラーニング型授業の質を高めるための
工夫(ディープ・アクティブラーニング、授業外学習、逆向き設計、反転
授業) 第5章 揺れる教授学習観(ラーニングピラミッドの功罪など)



溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）（2015）. **どんな高校生が大学、社会で成長するのかー「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプー** 学事出版

序章：なぜ、学校から社会へのトランジション（移行）調査か（溝上慎一）

第1章：生徒タイプの分析から見えてくる高校生の特徴（溝上慎一）

第4章：高校生の生活と意識における地域差（柏木智子）

第5章：島根県立横田高等学校の事例研究（椋本洋）

第6章：岐阜県立可児高等学校の事例分析（河井亨・浦崎太郎）

第7章：成果シンポジウムにおけるコメントとリプライ～

(2) 安彦忠彦「高大接続の視点から」

(3) 山田礼子「現代大学新入生をどう見るか」

(4) 中原 淳「企業の人材開発の観点から」

第8章：学校と社会をつなぐ調査から見えてくる高校の特徴～インタビュー

(1) 高崎市立高崎経済大学附属高等学校

(2) 鷗友学園女子中学高等学校

(3) 渋谷教育学園渋谷中学高等学校

(4) 神奈川県立横浜翠嵐高等学校

(5) 三重県立津高等学校

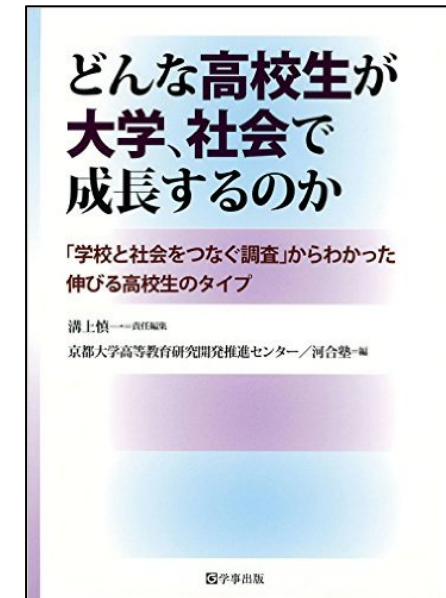
(6) 京都市立堀川高等学校

(7) 大坂府立茨木高等学校

(8) 大阪府教育センター附属高等学校

第9章 実践的な指導のポイント（椋本洋）

第10章 理論的まとめと今後の課題（溝上慎一）



【最新刊】

2015年7月刊行

YouTube動画「桐蔭学園のALの挑戦」



◆下記からご覧になれます。

<https://www.youtube.com/watch?v=9lOTu9blXwk&feature=youtu.be>

◆桐蔭学園はAL向上を目指して、外部からの授業見学をいつでも受け付けています。見学したい方は下記にご連絡下さい。いま夏休みですので、次は後期10/1～となります。 担当： 佐藤透 (satohru@toin.ac.jp)

◆12/12(土)には、公開研究会(中学高校の13講座の公開授業+シンポジウム)を1日開催します。公開授業は教室の収容関係で200名限定です。シンポジウムだけならどなたでもご参加になれます。

(松下佳代基調講演「高校と大学をつなぐディープ・アクティブラーニングとその評価」、ほか全国の先進事例紹介)

☞チューリップML、関東地域は新聞広告等で9月末に正式に案内をします。10/1に申込開始で先着順で受け付けます。

チューリップMLを作りました

中学高校に関するイベントや研究会の案内を受け取る、あるいは自由に投稿できるチューリップMLを作りました。
全国の中学高校関係者に配信されます。
情報を欲しい方、発信したい方はメンバー登録の上、どうぞご利用下さい。

<http://kyoto-u.s-coop.net/tulip/index.html>

講師プロフィール

<http://smizok.net/>

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年より教授(現在に至る)。大学院教育学研究科兼任。京都大学博士(教育学)。



日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、“*International Conference on the Dialogical Self*” Scientific Committee委員。公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、学校法人桐蔭学園教育顧問ほか、大学のAP委員、高校のSGH/SSH指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(大学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ!』(2006有斐閣アルマ、単著)、『高校・大学から仕事へのトランジション－変容する能力・アイデンティティと教育－』(2014ナカニシヤ出版、編著)、『活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－』(2014東京大学出版会、編著)、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(2014東信堂、単著)など多数。